向性評定に関するエピソード記憶の因子数

妻藤真彦

(美作大学)

キーワード: 質問紙法, 自伝的記憶, 尺度評定, 確信度

Number of factors in recollective rating of an extraversion-introversion questionnaire

Masahiko SAITO

(Mimasaka University)

Key words: questionnaire method, autobiographical memory, scale rating confidence rating

目 的

向性に関する質問を大学生に対して、週、年、高校2年生のときの記憶で回答するように求め、単に“私は～”という質問への重帰帰を行なうと重相関係数が7から8程度になる(妻藤, 2009)。また各時期について“～だった出来事を明瞭に思い出せる”という質問にしても重相関は同程度であった(妻藤, 2010)。この結果のみを見ると、例えば高校のときと大学生の連続性の程度(ある程度の変化)を示すか、あるいは現在の視点からの想起との連続性(変化)も含まれているという解釈になるかもしれない。記憶機能の要因(特に保持と想起・検索)が、どのように各時期に関する評定と関連しているのか探索する方法として、以下では評定そのものと、その評定に関する確信度を組み合わせた尺度を検討する。

Mills, Reyna, & Estrada (2006)は、要点(gist)的検索をcueするような質問の仕方と、逐語的(verbatim)検索をcueするときとで回答が大きく異なることを示しており、また質問によっては、2値判断とその判断に関する確信の程度とを混せて、評定値に変換していることを示唆するデータや、現在の自分と過去の自分に関する評定の相違が、確信度とある一定の関係を持つなどのデータが得られており(妻藤, 2007a; 2007b; 2008)、質問によって異なるタイプの情報が評定されている可能性が強い。以下では、要点的質問(妻藤, 2009)とエピソード詳細(逐語)的質問(妻藤, 2010)を比較する。

確信度の評定過程の仮説として、(a)信号検出理論タイプを前提とした変換尺度として(評定値 - 1) + (確信度 - 1) / 4、(b)変動率仮説(Juslin, 1997; Saito, 1998)のモデル1(中央変換)として(尺度値 - 3) × (確信度 - 4) / 4 + 3、(c)変動率仮説(Juslin, 1997; Saito, 1998)のモデル2(ベクトル変換)として、SQRT(尺度値の2乗 + 確信度の2乗)とする。

方 法

表1. 特性的記憶: 初期の 固有値 (> 1)

因子	尺度平均	累積%	信号検出	累積%	中央変換	累積%	ベクトル変換	累積%
1	3.23	40.33	3.19	39.85	3.09	38.66	2.88	35.96
2	1.51	59.18	1.53	58.92	1.83	61.53	1.99	60.82
3+	1.31	75.58	1.27	74.80	1.26	77.27		

+プロマックス回転後, 3番目は全て高校時代の記憶(内向と外向)

+

1と2は各々内向または外向, 2因子の場合は、高校も含んで内向または外向

表2. 情景記憶: 初期の固有値 (> 1)

因子	尺度平均	累積%	信号検出	累積%	中央変換	累積%	ベクトル変換	累積%
1	4.01	40.13	2.68	33.45	3.22	40.30	4.19	52.34
2	2.45	64.60	2.55	65.28	1.97	64.97	1.23	67.67
3+								

+プロマックス回転後,

1と2は各々内向または外向

特性的質問群(回答者160人のうち回答不備を除いた151人、女性)。それらに対して、特性質問群での“週”は“この一週間に・・・だった”であり、エピソード詳細質問群では“この一週間に・・・だった出来事を明瞭に思い出せる”である。同様に“年”と高校2年“の質問セットが用意された。どの質問セットも外向・内向ごとに個人内で平均されたので、各個人について10個の平均値がある: 尺度性121, 男性39)とエピソード詳細質問群(回答者172人のうち回答不備を除いた159人、女性115, 男性44)。5要因説の外向性に分類された12個の単語(和田, 1996)から、外向項目と内向項目(逆転項目)各3個ずつ6個をランダムに選び、“私は・・・な性格だ”という文のランダム順で向性質問セットとし、外向・内向ごとに平均された(尺度平均)。記憶質問の4セットの内“現在”は“今現在、・・・だと感じる”。これらの2種のセットは2群どちらも同じものであった。尺度値・現在・週・年・高校の5 × 2(外向・内向)。これらの10個の平均値を用いて各群ごとに因子分析(主因子法)。質問紙の表紙に研究協力依頼と結果の匿名処理・回答拒否の権利、回答の方法が述べられており、2ページ目の始めに向性質問セット、次に記憶セットが置かれた。現在から過去へと遡る順番のものと、逆順のものが作成され、両者ができるだけ同数に近くなるように工夫して配布された。

結果と考察

固有値が1以上を基準にしたとき(表1)、特性的質問(gist記憶)は高校時代の記憶が3番目の因子となるが、ベクトル変換では高校が別因子にはならない: 確信度が変動率仮説で決まっており、変換が記憶の要因を打ち消したと解釈。他方エピソード詳細質問(表2)ではすべて2因子であり、情景まで想起する場合は、評定過程に入力される情報に相違があると解釈。